

第8章 県内の取組事例

今年度、小学校、中学校ともに各校の指導改善努力によって、教科に関する調査は全国の平均正答率との差も縮まってきました。この流れをさらに確かなものとするため、学校や市町等教育委員会の努力や子どもたちの成長の様子に焦点を当て、指導事例として共有します。ここに紹介します学校や市町等教育委員会は、今年度調査の結果のみではなく、教育に関わる困難な状況を、継続的・組織的な取組や教職員の意識改革を進める中で克服しながら、学力向上の成果へと結びつけている学校や市町等教育委員会の例を取り上げたものです。

[幼保・小中学校一体] [3感教育]

－ 1歳から15歳までの「16年一貫教育の実現」

東員町教育委員会

目 標	全ての子どもたちが社会でいきいきとした自分の人生を歩めるように
-----	---------------------------------

東員町は、学力の面では近年高い位置で推移しており、学力に関する課題の解決という観点だけではなく、さらに進んで、幼・保・小中学校一体となって、子どもたちが将来にわたって豊かな人生を送れることを考えた教育政策に取り組んでいます。

取 組 ①	第1次～第4次「3つの提言」
-------	----------------

東員町では、平成15年度から中学校第1学年を対象に学力調査を開始しました。当時、読解力が弱いことが明らかになり、具体的な対応策が必要でした。

平成17年度に現場の先生で構成される「研究委員会」から「3つの提言」が出され、以降、3年ごとに継続して提言が出されています。

第1次 H17～19	10分間朝読書	豊かな心を育て、読書習慣をつける
	国語力の向上	話す・聞く・読む・書く力などの育成
	基本的な生活習慣の確立	子どもたちの学びの基礎を育てる
第2次 H20～22	PISA型読解力の向上	様々なテキストを理解し、熟考する力の育成
	家庭学習の習慣づくり	基礎学力の定着と主体的に学ぶ力の育成
	幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校の連携	学びの連続性を考慮した教育の充実
第3次 H23～25	「対話力と活用力」の向上	相手とともに問題を解決する対話力と課題を解決するための生活的・実践的な活用力の育成
	関わる力の育成	授業や生活の場で、「コミュニケーション力」の育成
	幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校の連携	学びの連続性を重視した教育の充実
第4次 H26～28	「書く力」の育成	思考したことを相手に伝わるように自己表現する術として、「書く力」を基礎基本から育てる
	運動能力の向上と社会性の育成	外遊びを充実させることで、運動能力の向上を図ると同時に、多くの友だちと関わりながら社会性を育てる
	16年一貫教育プランの実践	保護者とともに3感教育(※)の意義・内容を理解し、連携しながら共に取り組んでいく

※3感教育：「16年一貫教育プラン」で大切にしている、基本的信頼感、自己肯定感、自己有能感。

提言の年度は区切られていますが、過去の提言は全て現在も継続して重点実践事項として位置付けられ、積みあがっています。

これを見ると、学校（または教育政策）が成長・発展していくプロセスが見えてきます。第1次提言の時代は小中学校の範囲、学習指導要領の範囲で考えられていますが、第2次提言ではある意味世界標準とも言

えるPISA型読解力に着目するとともに、その力の育成は小中学校だけが関わるものではないことから幼保・小・中の連携が打ち出されています。第3次では、次期学習指導要領で重視されるであろう、コラボレーション力、コミュニケーション力といったいわゆる21世紀型能力の育成が提言されています。そして、第4次では全ての提言を包含する「16年一貫教育プラン（平成25年度～）」という大きな理念の実践とともに、顕在化している課題にもしっかりと対応する、というものになっています。

目の前の課題を解決するだけでなく、国の政策をも先んじるような先進的な教育政策が打ち出されており、しかもそれが、教育委員会・有識者からではなく、現場の先生によって構成される研究委員会から発信されている、ということが大きなポイントです。だからこそ、全ての園・校においての確実な実践・定着につながっていています。

取組② 16年一貫教育プラン

16年とは、命が宿ったー1歳から義務教育修了までの16年間を指します。地域福祉課とも連携しながら、母子保健事業等の充実も図られています。

また、東員町では幼保一体型の施設が小学校と隣接しているという環境にも恵まれ、保育者、教職員、園児・児童・生徒の交流が活発に行われています。

16年一貫教育プランの根幹をなすのが、前出の、3感 EDUCATION です。

人を信じる力の欠如、困り感が出せない関係	⇒	基本的信頼感 「この世に受け入れられているんだ」 「信頼してもいいんだ」
自分のことが「好き」と思える子どもが減少	⇒	自己肯定感 「自分は大切な存在なんだ」 「自分はかけがえのない存在なんだ」
たくましさ、鈍感さ、傷つきにくさがあった子どもたちの変化	⇒	自己有能感 「自分はこんなに得意なことがあるんだ」 「頑張れば、きつとうまくいく！」

これらを大切に育てていくことによって、子どもたちの「意欲」を高める保育・教育を目指しています。

取組③ さまざまな取組

16年一貫教育を包含する「3つの提言」に基づいて、東員町ではさまざまな取組が行われています。以下はその一例です。

とういん学び検定	「書く力」を高めるための国語力、国文法に関する検定 独自テキストを作成 テキストをしっかり勉強しておけば合格できる「とういん学び検定」（町民も参加可能） 該当学年のうちに繰り返し受検し、認定証を受け取る ⇒自己有能感を育てる
読書登山	0歳から15歳までに読んでほしい301冊 前期・後期に分けてオリジナルの感想コメント記入欄付きシール台紙を配布 読破したら認定証を受け取る ⇒自己有能感を育てる ⇒親子の会話など、関わる時間が増加 図書館・書店の利用が増加
弁当の日	小学校第6学年で、年3回、給食をなくし、児童自身が献立を考え、買い物をし、弁当を作り、弁当箱を洗う、という取組 ⇒自立できる力を養う
ぼくの夢・私の未来	0歳から15歳まで、年度末に夢を書きつづって蓄積

これ以外にも、園・校全体で取り組んでいることがたくさんあります。それぞれの園・校が特色ある取組を創造している中、東員町として大事にしている一定のことについては、どの園・校で過ごしても得られるように、ということが考えられています。

学校が動きやすいようにバックアップ

松阪市教育委員会

課題 平成26年度の教科に関する調査の結果と市全体の統一感

平成26年度の全国学力・学習状況調査は厳しい結果でした。

それまでも各校で調査結果の分析・公表を行ってきましたが、各校独自の観点で行っており、市全体で同じ方向を向いて力を発揮する体制が十分ではありませんでした。

取組① 共通の「課題把握シート」ですばやく、深い分析

松阪市教育委員会は、教育の中心は学校であり、どのようにしたら学校が動きやすくなり、学校での教育の充実が図れるかを考えるのが教育委員会の役割である、という姿勢が徹底されています。

調査結果も、児童生徒を直接見ている学校で分析を深め、児童生徒理解をさらに深めることが、課題の解決につながる、という考え方のもと、これまで学校独自で行ってきた調査結果の分析と授業改善への反映をやりやすくするために、平成26年度に市統一の「課題把握シート」を作成しました。

「課題」の基準を決める

市全体の状況を踏まえ「課題」ととらえる基準を明確にすることによって、スムーズな分析を実現しました。基準を決めておけば、これも課題ではないか、あれはどうか、と課題の特定の検討に時間を使わずに済み、どのようにして課題を解決していくのか、授業を改善していくのかにいち早く力を注ぐことができます。

教科に関する調査において、「平均正答率30%以下」「全国との差-10%以上」「無解答率20%以上」の設問に課題あり、と位置付けました。

これによって10月にはすでに全校「課題把握シート」の作成を完了し、解決に向けて動き出すことができました。

授業に返す

「課題把握シート」における主要な改善検討事項は、

- ・課題につながると考えられる要因（授業の中で）
- ・課題克服のためにどのように取り組むか
- ・教育委員会に求めること

の3項目です。

課題は授業の中にあるはずである、どのように授業を改善していくことが必要なのか、ということ、質問紙の結果も踏まえて検討しました。このような観点で課題を意識することで、「どのような力が求められているのか」ということについて教員の中で理解が深まっていきました。

取組② 教員研修の変化

市の研修では、「授業の充実」ということを主眼に、ワークショップ形式の実践的な講座を増やし、そこにはできるかぎり外部の講師を依頼し、今までの取組をより充実するため新たな視点を入れるようにしました。

また、校内研修にも、これまでは指導主事がなかなか出向けなかった状況がありましたが、松阪市独自のOB教員によるアドバイザー組織を作り、指導主事とともにできる限り各校の校内研修に参加し、学校とともに授業改善のための知恵をしぼってきました。

取組③ 本居宣長さんの教え 5つのチャレンジ

松阪市では、学識経験者、保護者代表、地域代表、学校関係者、教育委員会職員で構成される学力向上推進協議会を平成21年度から運営しています。

昨年度の協議会では、全国学力・学習状況調査の結果も踏まえ、郷土の偉人である本居宣長が残した多くの教えの中から課題解決に資するものを取り上げ、さらに子どもたちが実行できる「5つのチャレンジ」を定めました。これらはリーフレットになり全保護者に配布されているとともに、自治会でも回覧され、さらには、全教室にポスターとして貼られています。

子どもたちにとっては、プリントを一度見ておわりではなく、また校内の取り決めではなくもっと大きな公的なものとして毎日ポスターを目にします。自己を律する契機になるとともに、故郷を愛する気持ちにつながっていきます。学校からも、学校として発信したいことを、市を挙げてバックアップしてもらっていてありがたい、との声もありました。



取組④ 市独自の学力調査スタート

小学校第6学年、中学校第3学年になってから学力の状況を客観的に把握・分析をしても、卒業学年であり、なかなか本質的な手立てにつながるができなかったのが、子どもたちの状況を早い段階で把握し、できる限り課題を積み残さないようにするために平成27年4月から市独自の学力調査をスタートしました。(小学校第4・5学年、中学校第1・2学年国語・算数/数学)

6月に返却された結果データをもとに、夏休みの校内研修会では課題解決の手立ての検討を行い、短いサイクルでのPDCAサイクルの構築を実現しています。また、明らかになったつまづきを解消するために、ウェブページから「個別復習教材」を各学校で活用できるようにしています。

成 果 確かな学力の向上

平成27年度の結果には、児童生徒が粘り強く最後まで問題に取り組むことができるようになり、学校・家庭が一体となって改善に取り組むことができている状況が現れました。また、授業の冒頭でのめあての提示、最後での振り返りも徹底されてきており、小学校・中学校、国語・算数/数学全てが昨年度よりも向上し、特に小学校においては全てにおいて三重県の平均を上回りました。

今 後 ICTの活用の充実へ

フューチャースクールに指定されていた三雲中学校を核に、特に中学校でのアクティブ・ラーニングの充実を、ICTを活用して推進していく計画です。これによって、知識のつめこみではなく、自ら考え、行動できる子どもたちを育てていくことがねらいです。

「チーム笹川東小学校」の力を発揮

四日市市立笹川東小学校

はじめに 本校の概要

本校は団地造成後約40年を経過した住宅地に位置しており、住民の間には郷土意識が根づきはじめ、ふるさとづくりをめざした文化的・体育的活動が活発に行われています。地域住民の教育への関心も高く、子どもへの期待が大きい地域です。近年、外国にルーツを持つ人も多く住みはじめ、新しい地域の在り方が求められています。現在、本校には、全校の約5分の1にあたる約40名の外国にルーツを持つ子どもたちが在籍しており、多文化共生教育の推進を学校教育ビジョンの一つとして取組を進めています。

また、平成26年度から、県の学力向上に向けた指導体制確立支援事業の実践推進校の指定を受け、

「① 子どもに付けたい力を明確にした授業実践」「② 全国学力・学習状況調査、C R Tの詳細な分析と授業改善サイクルの確立」「③ 家庭・地域と連携した取組の充実」の3つの視点から取組を進めています。

取組 ① 全国学力・学習状況調査の分析から課題を焦点化して校内研修の柱を設定

全国学力・学習状況調査の結果から「書く力」について課題があることが明らかになったため、校内研修主題を「書く力をつけるための指導法の研究～読み手を意識して相手に伝えたいことを適切に表現できる子どもの育成」として、全ての教科で取組を進めています。目的や意図に応じて文章全体の構成を工夫したり、必要な内容を整理したりして表現する活動を充実させ、相手に分かりやすく伝える力をどのようにつけていくのか、その手立てを探ることを校内研修の柱としています。

取組 ② 効果的な習熟度別少人数指導の充実

学力向上に向けた指導体制確立支援事業による非常勤講師を活用して、3年生以上の算数科において、3つのコースに分かれた習熟度別少人数授業を実施しています。学習内容に応じて、コースを子どもたちが選択できるので、よりきめ細かな指導を行うことができています。また、発言したり、みんなの前で説明したりする機会が増えることから、子どもたちの表現力を高めたり、自己肯定感を高めたりすることにもつながっています。

取組 ③ 指導力を高める研修の推進

(1) 授業提案（全員）、本校の各種教育課題に対応した「ミニ研修会」を行うとともに、日常的なO J Tの推進に努め、ライフステージに応じた指導力の向上を図っています。

・「ノート指導活用交流会」「ICT活用実践交流会」「国語科実践研修会」など

(2) 学力向上に関する研修会を年3回行い、授業改善の視点等について、少人数非常勤講師も含め全教職員で共通理解を図っています。

① 5月「全国学力・学習状況調査 採点研修会」

「国語A」「国語B」「算数A」「算数B」の4つのグループに分かれて採点を行い、本校子どもの「強み」「弱み」について、全員が共通理解を図りました。本校の課題が「出題の意図を捉えたり、条件付きの問題の意図を読み取ったりして、記述回答すること」「根拠となる事柄を過不足なく示して判断の理由を説明したり、数量の関係を図に表したりすること」であることについて全員が把握でき、その後の課題解決に向けての意識がより高まりました。

② 8月「算数指導力向上研修会」

夏の研修会では、全学年を通して、どの単元でどういう図をかくのかを全教職員で洗い出し、それ

それぞれのよう指導をしていくのがよいかの教材研究を行いました。「丁寧に書きなさい」式の指導ではなく、具体的な指導方法について共通理解を図ることができました。

取組 ④ 家庭・地域と連携した取組

- (1) 生活科・総合的な学習の時間で学んだことの発表の場として、11月に保護者・地域の方を招いての「ワールドフェスティバル」を行っています。地域に出かけて調べたり、地域の方をゲストティーチャーとして招いてお話を伺ったりして、学んだこと、考えたことをまとめ、学年ごとに発表をしました。学校での学習の様子を保護者・地域住民に理解していただくよい機会となっています。
- (2) 学校での学習の様子、取組の内容等をホームページにて毎日配信しています。年々アクセス数が増え、保護者の関心も高まってきています。
- (3) 地域ボランティアと連携して「夏休み特別学習会」を実施し5日間の補充学習を行いました。平成25年度から始まったこの取組は、保護者からも好評であり、本校の夏の補充学習として定着してきました。

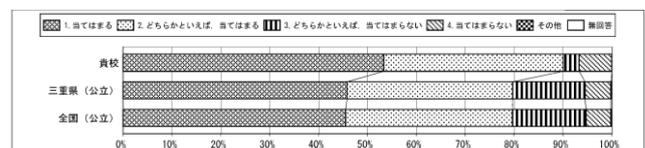
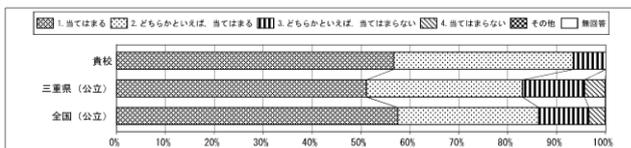
成 果 「チーム笹川東小学校」として教職員が一丸となって取り組む体制が整いつつある。

- (1) 非常勤講師も含めた全ての教職員が「学力向上研修会」にて「授業改善の視点」について共通理解を図ることで、「めあて」「振り返り」を意識した授業実践が、全ての授業において行われるようになってきました。児童質問紙でもこの項目について肯定回答が多く、子どもたちの学習に対する意欲も変化してきています。

【全国学力・学習状況調査「児童質問紙」から】

「5年生までに受けた授業のはじめに、目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか」

「算数の問題の解き方がわからないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか」



- (2) 今年度の調査結果を受けて、10月からは、「学んだことが日常生活といかに関連しているか、感じられるような場の設定を行おう」ということで、次のような取組を全校で行っています。

- クラス全員でジャンケンして、勝った人を計算して割合で表し、表にまとめよう。
- 一日3回教室の温度を測って、折れ線グラフにまとめよう。
- 委員会活動の中に、平均、割合などを使って情報を整理する活動を取り入れていこう。

計算結果を四捨五入したり、温度計の2度刻みのメモリを読んで折れ線グラフにしたりする活動、平均を計算する活動などを日常化して、毎日の生活の中にある算数的活動の場を意図的に設定しています。

今 後 笹川東小学校学習スタンダードの確立へ

教職員一人ひとり違う考えを持っていても、全員で子どもの成長を考える「チーム笹川東小学校」として、これからも実態把握と指導方法の交流を活発に行っていきます。そして、「笹川東小学校学習スタンダード」の確立に向けて取組を進めていきます。

「まなびばセット」の活用で授業が変わった

鈴鹿市立稲生小学校

課題 教科に関する調査は全国平均前後

児童は朝の授業の前も静かに席に座っており、掃除もよくやる落ち着いた学校です。学力は徐々に上がってはきていましたが、全国平均前後でとどまりそうな状況でした。

取組① 「生きる力につながる『言語力』の育成」の研究・研修（平成25年度～）

平成18年度から、「伝え合う力」の育成に取り組んでおり、活発な話し合い活動ができるようになった反面、発言が一部の児童中心になっていたり、自分の考えがもてない、表現できない、という児童がいたりすることが明らかになり、平成25年度からは「読む」「書く」を中心に、言語を活用するための基礎・基本の定着を図ってきました。辞書引き、群読、詩、パンフレットづくりなどを通して、語いも増え、書くことへの抵抗も減ってきました。

このことがベースにあったからこそ、次の「まなびばセット」の活用の効果が大きく表れたと考えられます。

取組② 「まなびばセット」の活用

平成26年度は、その時期に身に付けるべき基礎的・基本的な事項を確実に身に付けさせ、計算力、漢字力を高めるために家庭学習に取り組んできました。それとともに、第5学年では3学期には毎日「まなびばセット」を活用し、過去問も含めて、活用に関する問題に取り組んできました。

もちろん、児童が活用に関する問題に慣れてきたという面もあるでしょうが、ここで変わったのは、授業であり、指導法でした。複数の情報が与えられたときに、ポイントになる言葉に線を引いて整理しながら読んでいくように指導し、授業で児童の発言からなんとなくわかっている状態でよしとせず、きちんと最後まで言わせ、考えを漫然と書くのではなく、根拠を明確にして書くように指導する、など、普段の授業の中での発問が変わり、指導が変わってきました。

このように、短期決戦で、たくさんの活用に関する問題に触れることで、何をどう考えれば正解できるのか、そのためにどのような力を付けなければならないのか、その力はどうしたら付くのか、ということを教員自身がつかんだ、ということが最も大きな変容でした。おそらく、1年かけてゆっくり少しずつ取り組んでいたら、この変化は起こらなかったと考えられます。集中して教員が考え抜き、実践して得られた変化だと言えます。

全国学力・学習状況調査の問題、特に「国語B」「算数B」は、こういう授業をしてほしい、という国立教育政策研究所の問題作成のチームからのメッセージだと言われています。きっかけは「問題を解かせて解説する」ということでしたが、結果的に、教員は児童に力をつける指導のポイントを手に入れることができました。

取組③ プリントを使って自主的に言語技能を磨く

「言語技能を磨くワーク」と名付けて、プリントをあらかじめ印刷して棚に入れ、自主的に基礎学力の向上に取り組める環境を作っています。

1～3年生用と4～6年生用に分けて、学年を超えて取り組めるようにしています。

**取組④** 教員研修の充実

教師が変われば児童が変わる、教師を変えるのが校長の役目、という認識のもと、校長が率先して研修の充実を図っています。

校内研修を実施する前に、研修を担当している学力保障部から職員会議等で校内研修の具体的な進め方についての提案を行い、よりよい研修にできるように考え、参加する教員のレディネスを高めています。

また、タブレットPC（40台整備）を含めたICT機器の活用も積極的に研修プログラムに取り入れています。

校内だけでなく、積極的に校外の研修に出て、今までと異なる指導法に出会うことも推進しています。

取組⑤ 調査当日

全国学力・学習状況調査当日の児童への声掛けも大切です。最後まで考え抜くよう励ましたり、解答を忘れていたところ等を指さして指摘したりすることで、児童が自分の力を最大限発揮できるようにサポートしています。

成 果 児童の自信になった

稲生小学校の児童は比較的自己肯定感が低い傾向にあります。全国学力・学習状況調査で測っているのは、学力の一部ではありますが、前年度よりもどの教科も高い結果を残せたということは自信になります。3学期から「まなびばセット」をがんばって使ってきて、やればできるという証明になりました。

また結果もさることながら、授業改善の方策を手に入れることができたのが、大きな成果でした。

今 後 アクティブ・ラーニングの充実へ

平成27年度から、全領域において「相手を意識しながら、ともに学び合う子ども」をテーマに研究を行っています。言いつばなしの一方通行ではなく、相手を意識しながら聴き合う伝え合う活動を大切に、「ともに学び合う」ことで自らの力を高めていく子どもを育てる研究を進めています。これまで培ってきた、「読む力」「書く力」や習得してきた基礎基本をベースに、真のコミュニケーション力の育成に努めていきます。

進路保障をめざすキャリア教育の充実

伊賀市立柘植小学校

課題 生活体験の少なさから、広がりにくい将来ビジョン

十年ほど前、修学旅行で初めてE T Cを見た児童、臨海学校で初めて海の水が塩辛いと体感した児童、「将来の夢はフリーター」と近所のお兄さんをモデルとして見ていた児童、そういう子どもたちがいました。将来のビジョンも広がらない中で、学力も二極化し、授業も進めにくい状況に陥っていました。

そのころから、学校教育の中で見聞を広め、さまざまな経験ができるようにと取り組み始めました。

取組① 教育目標達成のための原則

柘植小学校では次の4つの考え方を軸に教育活動を組み立てています。

なかまづくり・学級集団づくり	メインエンジン・土台。人権空間を作り出す。
エンパワーメント	人権の燃料タンク。自尊感情・自己肯定感の育成。
リテラシー	学力の燃料タンク。コミュニケーション能力の育成。
キャリアビジョン	さまざまなキャリアモデルとの出会い。自己効力感・自己有用感の育成。

また各学年の年間計画は、「進路保障をめざすキャリア教育年間計画」と題し、授業・行事その他の活動が上の4つの原則のどこに位置づいているかを明確化して作成されています。タイトルから、全ての教育活動は、児童の進路（キャリア・将来）に資するものである、という考え方がうかがえます。

取組② 一枚文集

柘植小学校の教育の土台である「なかまづくり・学級集団づくり」のために重要な要素となっているのが、「一枚文集」です。児童は毎日日記を付けています。担任は毎日の日記を見て、これはみんなと共有したい、という題材を選び、給食後の時間に児童と話をしながら、思い出し直しをさせ、その対話の中で文章を膨らませ、推敲をさせ、完成に導いていきます。完成した作文は帰りの会で読みあいます。

ここで大事にしていることは、教員と児童、児童同士の距離が近くなるような題材選びです。児童同士がわかりあえるようなこと、失敗のエピソードなどを共有することで、距離が近づいていきます。

こうやって完成した作文は、「一枚文集」として年間70号以上を発行します。

日常の児童同士の会話以上にお互いのことがわかることによって、よりよい学級集団づくりができていきます。

取組③ 修学旅行で大学訪問・企業訪問

大阪・京都方面への修学旅行では、大学や企業を訪問しています。

大規模私立大学の美しいキャンパス、広々としたグラウンド、学内にあるコンビニエンスストア、見るものが全てが驚きであり、大学生のお兄さん、お姉さんが輝いて見えます。また、見学だけでなく、人権活動に取り組んでいる学生や高齢の学生、留学生などとの交流会も行っています。柘植小学校では人権教育に力を入れています。今やっていることが、将来大学に入っても、社会に出てもつながっている、ということが実感できます。

また、企業にも訪問し、お客様のためにいろいろと知恵を借りながら生き生きと仕事をしている姿を見せて、働くということはどういうことか、ということを感じさせています。

取組④ 職場体験は5年生と6年生で

平成27年度全国学力・学習状況調査の学校質問紙によると、小学校で職場体験を行っているのは、全国、三重県ともに42.0%でした。柘植小学校では、5年生（2学期）、6年生（1学期）の両方で実施しています。

児童一人1事業所とし、当日は児童が一人で体験先に行きます。半日を3日間行い、事業所の方に評価を書いていただいています。5年生を受け入れていただく事業所の方には、あえて厳しいフィードバックをしていただくようお願いしています。それをもとに担任は児童と話をし、6年生でのリベンジを誓います。よくなかったところを改め、6年生での職場体験を緊張の中で無事に終えた後、2学期には前述の修学旅行があり、生き生きと働く人たちの姿に触れ、働く意義を感じていきます。

このように、ひとつのねらいをもって、学年を超えて、学校全体で指導の流れを作ることができているところが柘植小学校の強さと言えます。

取組⑤ ^{つば}T-1グランプリ

人前で発表する力が弱かったため、コミュニケーション力を楽しみながら高める活動として、漫才選手権「T-1グランプリ」を開催しています。プロの漫才師に指導・審査に来ていただき、徐々に本格的な大会になってきました。今では敬老会に呼ばれたり、大会に敬老会の方を招待したりと、地域との関わりも深くなってきました。

また、通常の集会での委員会からの発表などでも、児童が意図して笑いをはさんだりして、明るく笑いのある学校となっています。

ほかにもCMづくりなど、プロジェクト・ベースト・ラーニングに取り組んでおり、いわゆる21世紀型能力の育成に力を入れています。

取組⑥ 学力向上のために

各学年、小テストなどで満点を取れなかった児童は、放課後、教員が徹底して個別指導を行っています。100点になるまで繰り返し指導し、基礎基本の徹底に注力しています。夏季休業中も半期60枚の国算を中心としたプリントを準備しており、プールの後で指導しています。

こういう指導に児童ががんばってついてくるのも、前述のような活動を通じて、教員と児童の、また児童同士の関係性ができているからです。

また、家庭学習強調月間や親子読書強調月間を設定し、家庭との連携も強化しています。

ほかにも、漢字検定への取組や新聞コラムの書き写しなど、さまざまな活動を行っています。

成 果 授業がわかりやすく楽しい

全国学力・学習状況調査の教科に関する調査の結果も伸びていますが、学校として重視しているのは、「授業がわかりやすく楽しい」という指標です。実に96%の児童がYESと答えています。「笑いのある学校」ということだけでなく、学校が自分を成長させてくれる場である、ということを感じ取っているのでしょう。

今 後 授業改革と自ら学ぶ力の育成

これまでの取組から一定の成果は出てきましたが、教科の学習に関して言えば、児童は学校の指導の流れに乗って勉強をしているにすぎないのが現状です。まだ「自分の学び」になっていません。児童自らが学ぼうとする授業づくりが必要です。経験の浅い教員が多いので、「学びあい」を中心に、環境が変わっても将来にわたって自ら学ぶ力を付けられるような授業づくりの研究と指導力の向上が今後必要です。

生徒の成長を目指した、落ち着いた学校づくり

四日市市立常磐中学校

課題 まじめに取り組む生徒がきちんと取り組める環境づくり

四日市市の市街地に隣接した本校は、以前は授業に集中できない、指導が困難な生徒や不登校傾向に陥る生徒も目につく学校でした。そのため落ち着いて授業を進めることが困難な時期もありました。

そのような中で、まじめに取り組む生徒がきちんと取り組める環境づくりを目指して、保護者や地域の協力も得ながら全職員が取組を進めてきました。

取組① 教職員の組織的な学校づくり

学習に前向きに取り組むことができる授業を進めるために、まず安心して過ごすことができる学校づくりが必要となります。そのために個々の教員が取り組むのではなく、教員集団の組織として取り組む以下の体制を継続しています。

- 1 教師の意識確立⇒教師＝指導者であることの確認
- 2 生徒情報の共有⇒報－連－相の徹底
- 3 指導内容の統一⇒学級指導・授業規律・生活指導など、組織として決めたことを全教師が取り組む
- 4 全教師での指導⇒必ず複数の教師の目が届く状態での生徒の活動環境をつくる・・・廊下巡回など
- 5 家庭訪問の励行⇒複数教師による家庭訪問を積極的に実施する
- 6 基本的生活習慣の確立⇒あいさつ・言葉づかい・身だしなみ・時間厳守の指導の徹底
- 7 生徒会・委員会活動の活性化⇒あいさつ運動、交通安全指導、生徒集会など
- 8 教育相談や指導に関する研修活動の活性化⇒教育相談期間の設定・ＱＵ研修など
- 9 保護者・地域・関係機関・専門機関との連携⇒PTA・自治会・教育委員会・児童相談所・警察など
- 10 研修活動の活性化⇒授業研修・生徒指導研修・教育相談研修・人権教育研修

このような取組で生徒の学校生活が安定し、授業に前向きに取り組むことができる状況がつくられてきました。そして、「学校生活＝社会生活」という観点から、生徒が中学校を卒業し社会生活を営むための基本となる社会性を身に付けることを意識した指導を進めています。

取組② 授業に前向きに取り組むための雰囲気づくり

落ち着いて積極的に授業に参加し取り組もうとすることが、学習内容の理解を深め、より学習意欲と学力を高めることにつながります。日々の落ち着いた学校生活のスタートを目指して「朝の10分間読書」を毎日実施しており、担任は教室内で、また副担任は廊下を巡回し生徒の様子を観察しながら読書を進めています。この間に登校していない家庭への連絡等も行い、朝の読書終了と同時に朝の学活を始めています。また、授業はチャイムと同時に始め、チャイムと同時に終わることを徹底し、生徒の規則正しい生活リズムを作っています。休憩時間中も生徒だけの状況は作らず、前時の授業の教師が教室や廊下を巡回しながら、生徒とのふれあいを深める取組を続け効果を上げています。また、「わかる授業・わかりやすい授業づくり」を目指して各教科での取組と学校全体での研修を進めています。

取組③ 意欲と学力を高める授業づくり

学ぶことの楽しさ、考えることの面白さ、そして学んだことを生活に役立てようとする姿勢を育てるために、「点数の順位」ではなく、生徒の「生きる力」としての学力の向上を目指した取組を進めています。

- 1 小グループによる「学びあい」の活性化・・・教員の研修活動のテーマとして、各教科で生徒どうしのコミュニケーション力の向上を目指した、話し合い・教えあいの活動を積極的に取り入れた各教科の授業指導を進めており、個人の公開授業や全体での授業研究も積極的に進めています。
- 2 少人数指導と学習支援の取組強化・・・学習意欲と授業理解を目指して、県や市の加配を活用しながら、2・3年生の英語でティームティーチング、また数学で習熟度別少人数編成による授業を進めています。

ティームティーチングでは、個々の生徒の支援がしやすくなり、また少人数編成では生徒の習熟度に合わせた指導の進め方や生徒どうしの「教えあい」や「話し合い」を深める活動が可能です。特に数学では「きらい」や「わからない」生徒の割合を減らす効果が出ており、学調の生徒質問紙でもその傾向は表れています。

3 積極的な学習支援・・・英語や数学以外の教科では、空き時間の教師が授業に入り、学習を支援する取組を進めています。このような取組が、落ち着いた授業の雰囲気をつくりだしています。

4 毎時の授業の「めあて」の提示と「振り返り」の取組・・・県教育委員会の学力向上推進指定校の取組をとおして、毎時の「めあての提示」、「振り返り」を意識した授業づくりを進めています。取組は徐々に定着しつつありますが、生徒の目線では「めあての提示」に弱さがあり、校内研修の一環として行う全教師による授業公開でも「めあての提示」を意識した取組を目指したいと思います。

5 基礎学力の定着を目指した取組・・・本校では帰り学活前の10分間を使って、漢字や英単語、計算などの基礎学力の定着を目指した学習を授業進度に合わせた課題で毎日継続的に進めています。この学習内容も定期テストに取り入れ、評価の対象として活用しています。また、長期休業中は学力補充や質問日を設け、自主的な学習の支援も行っています。

6 掲示物教材の活用・・・教室や廊下に、学習内容の基礎事項に関する掲示物を積極的に掲示する取組をすることで、生徒が興味を持って学習を進めるきっかけづくりをしている教科もあります。

取組④ 保護者・地域と連携した取組

四日市市の中学校では、年間8回の土曜授業・土曜活動を実施しています。この取組は、保護者や地域住民の参加も得ながら生徒とともに活動する機会を増やし、保護者や地域住民と生徒をつなげ「地域の中学生」という観点で見守っていただく雰囲気を醸成しています。しかし、学調質問紙の「地域活動への参画意識」や「地域貢献への意欲」は相対的に低い傾向にあります。保護者や地域住民と連携した取組をより深めることで「地域の一員」としての意識を高めていきたいと思っています。

成 果 現在の生徒の状況

長い年月をかけての教職員や保護者・地域住民の取組の中で、生徒たちの学校生活は年々落ち着きを見せています。保護者や地域からも良い評価をいただき、学校行事や部活動も活性化し成果を上げています。

また総合的な学習や道徳・学活の取組の中で考え、体験を深めることが生徒の自信につながり、学調質問紙の「自尊心」や「将来の夢」また「社会貢献意欲」などは、全国平均を大きく上回る結果を示しています。「学校へ行くことが楽しい」と答える生徒の割合も高く、生活の安定と、学習や活動に積極的に取り組もうとする姿勢が育っていると考えられ、生徒の学校生活の安定化とともに学力も向上している傾向にあります。

四日市市では、「小中学びの一体化」の取組を全市で進めており、小中が連携する形で「9年間の学び」ととらえながら「授業づくり」「生活指導」「人権教育」などを進めています。そして小学校では、滑らかに中学校に繋げるための取組を積極的に進めています。また小中学校の教員の「乗り入れ授業」や「生徒情報交換」などの交流も進めています。このような小中学校の連携も中学生の学力の向上にむすびついていると考えられます。

今 後 生徒が主体となる、より活気がある学校づくり

現在の本校の生徒は安定した学校生活を送っていますが、今後厳しい状況に戻る可能性は十分にあります。そのような事態を避けるためにも、現在全職員で進めている取組を継続・発展させ、生徒が主体となる、より活気がある安定した学校づくりを進めていくことが最大の課題です。そのために職員間の信頼と連携を深め、同時に保護者や地域との連携を深めていくことが大切です。

また、生徒の学力を一層向上させるために、毎時の「授業の目当ての明確化」と「授業の振り返り」を継続しながら、「授業の振り返り」と「学習内容の定着」に結びつけた「効率的な家庭学習の在り方」についての研修を進めていきたいと思っています。

居心地のよい落ち着いた集団づくりとともに 行事を通じた自己肯定感の育成

紀北町立紀北中学校

課題 学びに向かうレディネスが低い

全体的に素朴でまじめではありますが、かつては、落ち着いて読書をしたり、自主的に勉強をしたりすることが苦手な生徒が多い学校でした。

学力面では基礎的な知識理解にも課題がありましたが、特に相手に自分の考えを伝える力に課題がありました。また、学力の向上のためには、「楽しい学校」を学校像にし、居心地のよい学級集団づくりと安心できる人間関係づくりも必要であると考えました。

このような中で、授業改善と並行して、QU（学級満足度調査）等を活用しながら、居心地のよい落ち着いた集団づくりに取り組んできました。

取組① 本を通じた活動

朝読書

総合的な学習の時間の中に位置づけて、朝の10分間読書を行っています。定時前から読書を始めている生徒も多く、落ち着いた雰囲気の中で読書に取り組むことができおり、その雰囲気のまま第1時限の授業に入ることができるようになりました。

メディアセンター（学校図書館）の活用

紀北中学校では図書館司書の配置を受けており、定期的に学校に来てもらい、図書館活用の授業の支援をしてもらっています。

「ブックトーク」により中学生が興味をもつような本を紹介してもらったり、教科の授業での調べ学習と連携して、「ライブラリー・クエスト」を行ったりしています。「ライブラリー・クエスト」とは、メディアセンターにある本に答えが載っている教科学習に関わるクイズを出題し、本を探して答えを見つける、という活動です。4人一組で協力し合って答えを探します。また、4人という少人数なので、全員が自発的に調べ学習に参加できます。

読み聞かせ

3年生の生徒が隣接する幼稚園で読み聞かせを行っています。人前で何かをやるというよい経験になるとともに、園児との交流で気持ちがやさしくなり、笑顔を作り出す場にもなっています。

このように、読書に関連した取組を進めることによって、生徒にとって本は身近な存在となり、本が好きだと答える生徒の割合は増えてきました。

今後、さらに小学校での読み聞かせにも広げていき、本を核にしての幼・小・中の連携の強化が構想されています。

取組② フラワー・ブラボー・コンクール

東海地区近県の学校で取り組まれているフラワー・ブラボー・コンクールに1年生が参加し、花を育てています。長年取り組んでいる活動であり、地道な作業が多く、がんばったプロセスを大切に、そのことを評価するよう心がけてきました。そのような中で平成27年度は学校花壇コンクールで大賞を受賞し、1年生にはよい自信につながりました。1年生の取組なのですが、台風が来たときに、部活をやっていた2、3年生が自主的に花を安全な場所に移動させることに協力するなど、すでに学校全体の大切な伝統・文化になっています。

花壇に入らない余った苗は、地域の方へ配布していますが、前述の本と同様、花を核にした小学校や幼稚園との今後の連携も考えられています。

取組③ 行事を通じた自己肯定感

自己肯定感を高めるためには、他者と比べてどうか、という観点ではなく、過去の自分と比べて成長していることを確認することが大切です。また、結果は必ずしもうまくいかないこともあります。結果だけではなく、プロセスにおいてどれだけがんばったかを大切にするように常々指導しています。

その一環として、体育祭などの行事において準備段階も含めて、一人ひとりがどのようにがんばっていたかを生徒同士で相互評価をしています。一人がクラスメート一人ひとりのがんばりを全員分カードに記入して、交換します。ほめられることばかりなので、周囲からの認められ感が得られ、自己肯定感を高めることに役立ちます。

取組④ 振り返りシート

授業改善として、グループで話し合いをさせる場面を意図的に設定したり、その結果を発表させたりするなどの工夫をしています。このことで相手に自分の考えを伝える力が少しずつ育ってきています。また、三重県全体の課題として、授業の冒頭でのめあての提示、終了時の振り返りが挙げられていました。紀北中学校でも実施しているのは一部の教科であり、学校全体では徹底できていないのが現状でした。

そこで、平成26年度は全ての教科で共通のフォーマットを準備し、「今日のめあて」と「振り返りとして、できたこと・わかったこと・感想」を書くように徹底しました。その結果、関連の生徒質問紙では全国や県の平均よりも大きく上回るようになりました。平成26年度に全体で取り組んだ結果として、振り返りシートについては、共通のフォーマットではなく、教科の特性に応じた形式が必要であるということがわかってきました。徹底したからこそ、現在は、教科特性に応じた形式が必要であるということがわかってきました。そのため、自由に感想を書くのではなく、穴埋め形式で知識事項を確認する等の工夫も含めて教科ごとの振り返りシートの検討を進めているところです。

取組⑤ 学習サポート

3年生では9割近くが塾へ行っていますが、家庭学習はあまり定着していない実態があります。今年度は宿題の出し方を工夫することで自主的に家庭学習に取り組むような習慣を身につけさせたいと考えています。そのために、家庭で取り組みやすい宿題になるように基礎と応用のバランスを考えるなど宿題の出し方とそのチェックや評価のし方を工夫しています。

また、今年度の夏季休業中の学習会への3年生の出席率は、ほぼ100%でした。この学習意欲の向上は、これまでの学級づくりや、人間関係づくり、授業づくりの取組の成果であるといえます。

今 後 小中の連携を強化し、9年間の成長の姿を明確に

落ち着いて学校生活を送り、多くの生徒が学校が楽しいと感じるようになりました。また、読書や勉強に向かう気持ちも少しずつ高まってきています。

今後は本や花などのアイテムを活用し、小学校との連携を強めながら、小中の9年間でどう過ごし、どういう姿で卒業していったらほしいか、小中で共有していく必要があります。そして、居心地のよい落ち着いた集団づくりを基盤にし、めざす子どもの姿を明確にして取り組むことが、学力の向上につながると考えます。